

形而上学としての倫理

——『全体性と無限』についての試論——*

富 岡 新

1. 序論

1-1. 本稿の狙い

『全体性と無限』という書物が意味していることは何か。これを明らかにすることが本稿の目標である。言い換えれば、この書物においてレヴィナスによって語られた言葉が提示する意味、そしてその言葉自体を溢れ出す豊穡な意味それ自体を表現することが本稿に課せられている。レヴィナスは読者に語りかける。読者はそれに対して応答しなければならない。本稿は、レヴィナスから私への呼びかけに対する応答を試みるものであると言ってもよい。

さらに、本稿はレヴィナス研究を目的として書かれたものではない。レヴィナスの来歴や人となり、この書物とレヴィナスによって著された他の書物との関係を明らかにすることが目指されているわけではない。たしかに、レヴィナスを取り巻いていた時代、風土、人物、思想潮流等々から、著書の考察を行う方法もあるだろう。また、レヴィナス哲学の変遷をたどりながら、『全体性と無限』を位置づけることも可能だろう。しかしながら、私が関心を持っているのは、あるいはより本質的であると考えるのは、レヴィナスがこの『全体性と無限』という書物（場と言ってもよい）の内部において語っている言葉であり、その外部ではない。この書物自体が語りだすことが示す意味こそが『全体性と無限』にとって本質的であると考え。したがって、本稿では先のような方法をとらない。レヴィナスの言葉ひとつひとつを注意深く受け入れ、読み解いていくことが本稿では目指されている。そしてその解釈にしたがって、『全体性と無限』が私に対して表した意味を本稿において記したいと思っている。本稿は、『全体性と無限』研究である。

* 社会科学総合学術院厚見恵一郎教授の指導の下に作成された。

1-2. 『全体性と無限』の構成

『全体性と無限』は、序文、第一部〈同〉と〈他〉、第二部内部性とエコノミー、第三部顔と外部性、第四部顔のかなた、結論、という目次になっている。全体の構成としては、第一部が俯瞰的な概論の役割を果たしている¹⁾。『全体性と無限』における基本的な概念も後の部に先立って一通り論じられている。ただし必ずしも網羅的でかつ体系的であるわけではない。秩序立って語られているのではなく、叙述は錯綜している。第二部、第三部、第四部は第一部で示されたことについての詳論である。第二部は内部性について、第三部は外部性について、第四部は内部性と外部性のかなたについて論じられる。まずさしあたって重要であるのは第一部であり、第一部で述べられている概念を整理することによって、『全体性と無限』の基本的枠組みは明らかになるだろう。

本稿は、まず『全体性と無限』の序文においてレヴィナスが示した狙いを明らかにし、さらに概論的な第一部と内部性を問題にした第二部、そして外部性を問題にした第三部を中心に読解することによって、『全体性と無限』で問題となっている構図と、レヴィナスが提起した倫理という言葉の意味とを解釈しようと試みるものである。

2. 序文について

2-1. 無限なもの

戦争状態によって道徳は宙ぶりにされてしまう。戦争状態になると、永遠なものとされてきた制度や責務からその永遠性が剥ぎとられ、かくて無条件な命法すら暫定的に無効となるのである。戦争状態がありうることで、人間の行為にあらかじめその影が投げかけられている。(レヴィナス, 2005, 13 頁)

序文は戦争状態についての言及から始まる。戦争という非常な状態は、道徳を無効にする。定言命法ですらそうなのである。戦争は特殊的でかつ普遍的な秩序をつくりあげてしまう。その秩序に対しては誰も無関係ではありえない。

ところで、なぜレヴィナスは戦争状態から論考を始めたのであろうか。それは戦争というものが全体性という概念が指し示すものの最たるものであるからである。戦争は全体性であり、諸個人を包括しながら諸個人に意味を与える。戦争状態の国家に属している者はその国家の外部であることはできない。兵士は戦争において祖国のために戦う闘士であるように、諸個人があらかじめもっていた意味は喪失され、戦争という全体性が意味を付与する。逆にいえば、戦争状態の外部からは諸個人の意味がわからなくなってしまう。そのようにして、戦争は人格を破壊してしまう。

戦争状態がありうると認めながら、普遍的な道徳規範を確定し、それに安住することはできない。規範というものがもし確定でき、実践されとしても、戦争状態がありうるこ

とによってそれは瞬時に欺瞞になってしまう。戦争という状況の可能性によって、人間の道徳は常に無効になる可能性をもっている。

無限なものとの関係を経験ということばで語ることは、たしかに不可能である。無限なものは、それを思考する思考をあふれ出してゆくからだ。無限なものがこのようにあふれ出して生起するものこそが、無限なものの無限化にほかならない。だから、無限なものとの関係については、客観的な経験といった語とはべつの語によって語りだされなければならないであろう。とはいえもしも、経験ということばが絶対的に他なるものとの関係——ことばを換えれば、思考をつねにあふれ出すものとの関係——を意味するものにほかならないとするならば、無限なものとの関係によってこそ、とりわけて経験と呼ばれるものが達成されることになるのである。(レヴィナス, 2005, 23 頁)

戦争状態における秩序という全体性は、この無限なものを前にして危ういものとなる。無限なものについての経験を語ることはできないかもしれない。しかしながら、客観性をもった言葉——言葉は客観性を備えてこそ意思伝達の手段となるのであるが——ではない言葉では語ることはできるかもしれない、とレヴィナスは指摘しているのである。『全体性と無限』におけるひとつの目標は、この無限なものを記述することなのである。無限なものを記述することによって、同時に、全体性としての西欧哲学²⁾が批判されることになる。

全体性に対してレヴィナスが擁護しようとするものが主体性である。ただし、それは自己のエゴイスティックな抗議として捉えられるものではない。もしそうであるなら、その主体性はただの主観主義に堕してしまうだろうし、様々な客観性や必然性によって論駁されてしまうことになるだろう。そうではなく、レヴィナスの言う主体性は無限なものの観念において基礎を与えられた主体性である³⁾。『全体性と無限』はこの無限なものを巡って叙述された論考であり、さらに先取りするならば、その無限なものとの関係は〈他者〉によって可能になるということを明らかにすることを目指しているのである。

2-2. 主体性

また、序文には『全体性と無限』における概念がどのように提示され、展開していくかが叙述されている。レヴィナスはその方法を現象学に負うていると言う。現象学の方法、それはすなわち志向的分析である。志向的分析によって可能になるのは、特殊具体的なものの分析である。さらに言うならば、志向的分析こそが全体性の外部にあるような諸存在の分析を可能にするのである。全体性の外部で諸存在について分析すること——全体性から意味を付与されていない存在について分析すること——とは、あらゆる文脈を度外視して「それ」を「それ」としてみることである。

ここで言われている志向性とは、哲学に特有の観想という営み、視覚によって対象を直観するのとは別のものである。

〈同〉と〈他〉とのあいだの関係はかならずしも〈同〉による〈他〉の認識に連れもどされるのではないし、〈同〉に対する〈他〉の啓示につきることでもない。啓示そのものにしてからが、開示性とはすでに根底からことなっているのである。(レヴィナス, 2005, 29 頁)

〈同〉は同一性をもつ者、〈他〉は他性をもつ者である。つまり〈同〉とは、つねに絶えず同一性を所有するものである主体であると言ってよい。それに対する〈他〉はその主体の外部である〈他者〉である。〈同〉と〈他〉の関係はかならずしも認識する／されるの関係ではないということは、観想によってだけでは把持できないような何かが〈他〉に備わっているということである。先に述べた無限なものの観念による主体性の基礎づけやここで述べられている啓示については後に論じることになる。さしあたって序文においてレヴィナスによって述べられた『全体性と無限』の目標と方向性は次のようになる。

本書の手づきは、まず全体性の観念と無限なものの観念を区別し、無限なものの観念の側が哲学的に優位にあることを肯定しようとするものとなるだろう。本書が語りだそうとするのは、無限なものが〈同〉と〈他〉との関係においてどのように生起するか、無限なものの生起がまさにそこで作動する領野において、乗り越え不可能な特殊なもの、人格的なものが、いったいどのようにしていれば磁場をかたちづくることになるのかである。(レヴィナス, 2005, 25 頁)

かくして、『全体性と無限』は全体性批判、あるいは主体性擁護の一書であると示される。

3. 第一部〈同〉と〈他〉について

3-1. 形而上学とは何か

第一部においてレヴィナスが試みるのは、形而上学の様相を記述することである。あるいは形而上学における目指す者と目指されるものの関係を記述することであると言ってもよい。

なぜレヴィナスは形而上学について記述しなければならなかったのか。また、なぜ形而上学についての記述から始めなければならなかったのか。それは、伝統的な哲学が形而上学の本質を捉え損ない、また、この誤謬こそが人間にとって決定的であると考えたからではないだろうか⁴⁾。したがってわれわれはまず、レヴィナスが告発する伝統的な哲学がもつ確信を理解するように導かれる。

「ほんとうの生活が欠けている」。それなのに私たちは世界内に存在している。形而上

学が生まれ育まれるのは、このような不在を証明するものとしてである。だから形而上学は、「べつのところ」「べつのしかた」「他なるもの」へと向かっていることになる。……形而上学はじっさい……私たちになじみ深い世界から旅だち、私たちが住んでいる「わが家」をはなれて、見しらぬ自己の外部、向こう側へおもむく運動としてあらわれるのである。(レヴィナス, 2005, 38 頁)

形而上学は他なるものに向かう運動であると定義されている。レヴィナスによれば、他なるものとは自己ではない何かであるのだが、形而上学における他なるものとはその本質から言って「絶対的に」他なるものである。「絶対的」という語は形而上学者、すなわち主体と他なるものの間にある踏み越えられない隔たりを示している。つまり、これら二項の「分離」と他なるものの「超越」が形而上学において前提とされている。二項は地平を共有しないのである。したがって、「形而上学者と他なるものが全体化することがない」(レヴィナス, 2005, 44 頁)。このような絶対的に他なるものの他性が可能になるためには条件がある。もう一方の項が絶対的に〈同〉であることである。一方が絶対的に〈同〉であるからこそもう一方が絶対的に〈他〉であることが可能になる。ただし、〈他〉が他性をもつことは〈同〉との対立によるものでもなければ、〈同〉を裏返すことによるものでもない。

〈同〉とはどのような様態であるのか。レヴィナスは〈同〉という語を用いて、同一性の所有を示している。これは〈私〉であることと同義である。〈私〉とは常に〈私〉であり、どのような事柄に対しても〈私〉であったし、これからもそうである。逆に言えば、横断的に同一性を再発見し続けることができる存在こそが〈私〉である。レヴィナスはヘーゲルを援用してこのことを表現している⁵⁾。

それではこの〈同〉による絶え間ない同一性の所有はどのようにして為されるのか。絶え間ない同一性の所有とは、〈私〉が同一性を所有しながら外部のものをも自らに同一化させていくことである。この同一化は、人間の知性によるものである。知性とは、観想によって対象を認識し、そして概念化する人間の能力である。このような「見ること」による観想の図式は、古代から形而上学において用いられてきた。そしてハイデガーによって存在論が問題にされた。超越を存在という概念に連れ戻すことによって了解可能にすること、これが存在論である。このようにして人間は知性を用いることによって外部のものを認識ないしは了解し、概念化することによって表象として内部に取り込むことができるとされてきた。この点においてレヴィナスは伝統的な哲学を根本的に問いただす。そもそも本質的に超越、分離している〈他〉を存在という概念のもとで理解することは、超越から超越性を拭い去ること、つまり超越を〈同〉の地平へ引きずりおろすことであると批判するのである。したがってそれはもはや超越ではなく、本質的に形而上学ではなくなる。なぜなら、形而上学とは他なるものに赴く運動であるからだ。哲学、あるいは人間の知性

が、すべてを取り込んでしまうがゆえにレヴィナスはこれらを批判するのである。

しかしレヴィナスは知性のもう一つの側面を見て取る。それは、批判的であることである。知性による観想は、観想する〈同〉の存在論の遂行をも問いただす。「観想が有する批判への志向は、観想と存在論のかたへと観想を導くことになる（レヴィナス、2005、61頁）」のである。つまり、すべてを取り込んでしまう知性そのものをも批判できる可能性を知性はもっているということだ。しかし、レヴィナスはこの観想の批判的側面は〈同〉の自発性によっては起こりえないと付け加えている。ではそれを可能にする契機とは何だろうか。それは〈他者〉である。〈他者〉は本質的に絶対的に他なるものであるから、〈他者〉の現前によって〈同〉はみずからに取り込むことのできない外部があるということを自覚し、知性の全能感は挫折する。

絶対的に〈他なるもの〉とは〈他者〉である。……共通の祖国が存在しないことによってこそ〈他者〉は〈異邦人〉となり、その〈異邦人〉がわが家をかき乱すことになるのだ。とはいえ〈異邦人〉は自由な人間をも意味している……〈異邦人〉と共通する概念をもたないこの私にしてもやはり、〈異邦人〉と同じように類を欠いて存在していることになる。このことが、私たちはそれぞれ〈同〉と〈他〉であるということだ。（レヴィナス、2005、52頁）

この引用から次のことが言えるかもしれない。すなわち、人間の自由とは内面における同一化であり、それによってもたらされる自足である。そしてその内面の自由が人間に内在しているからこそ、われわれは〈私〉であり、〈他者〉に対する〈他者〉であり続けるほかないのである。〈他者〉は〈私〉の内面の自由によって捉えることができない絶対的の外部、概念におさまらない動者として〈私〉に対して現前する。この〈他者〉の現前が、先の観想の批判的本質を実現する契機であり、これによって〈私〉の自由が問いただされることをレヴィナスは倫理と呼んでいる。

倫理とは形而上学的関係である。なぜなら、〈他者〉は絶対的に他なるものであるからである。したがって、〈他者〉との関係は、認識する／されるの関係ではありえない。形而上学は他なるものへの運動であることを最初に示したが、それでは「分離」と「超越」を前提とする〈私〉と〈他者〉はどのような関係を結ぶのであろうか。

3-2. 倫理的关系

倫理＝形而上学的関係を実現するためには、〈同〉と〈他〉が関係していながら、〈他〉の超越が保持されなければならない。レヴィナスの言葉で言い換えるなら、それが〈他者〉を迎え入れることである。そして、それが可能になるのは、ことば⁶⁾によってであるとレヴィナスは言う。ことばによる〈同〉と〈他〉との関係は「本源的に語りとして機能する（レヴィナス、2005、53頁）」。

ことば、あるいは語りとは何かという問題に立ち入る前に、「無限なもの」について触れなければならない。レヴィナスは無限なものについてデカルトのコギトを援用して考えている。「デカルトによれば、「私は考える」は、どのようにしてもそれが内包することができず、じぶんがそこから分離されている〈無限なもの〉と関係を取りむすぶ。その関係が「無限なものについての観念」と呼ばれるのである（レヴィナス, 2005, 75 頁）」。無限ものの無限性は、無限なものが超越的であり絶対的に他なるものであるかぎりの超越に固有なものである。このようにして、〈他〉は無限なものである。この無限なものは渴望によって（測定されえないということが）測られる。レヴィナスは渴望という語を、欲求と明確に使い分けている。その区別は端的に言うと、渴望とは主体にとって受動的な情動であって、欲求は主体にとって能動的な情動である。渴望は、渴望されるものからの主体に対する呼びかけによって引き起こされるのに対して、欲求は主体の飢えや渇きなどの欠落を埋め合わせるために主体から発するものである。渴望は決して充たされ得ないが、欲求は充たされうる。渴望は渴望されるものから生まれる。「〈渴望〉とは啓示である（レヴィナス, 2005, 107 頁）」。

したがって、形而上学は啓示によって引き起こされるのだと考えることができる。無限なもの、つまり〈他者〉は、〈私〉の自発性に関わらず〈私〉に呼びかける。〈私〉はその呼びかけに対して否応なしに応答しなければならない。形而上学はこのようにして開始される。〈他者〉が呼びかけるとはどのような事態なのか。〈他者〉は、〈私〉があらかじめもっている観念を超越して現前する。レヴィナスはこの現前の様式を顔と呼んでいる。「顔はその性質によってあらわれるのではなく、それ自体としてあらわれる。顔はみずからを表出する（レヴィナス, 2005, 80 頁）」。みずからをそれ自体として表出するということは、繰り返し論じてきたように、〈他〉は〈同〉の認識を常に溢れ出し、ア・プリオリなカテゴリーの中で思考されることを拒否する。このことが何を意味するか。それは、直接的に存在者にたどり着くことが可能なことである。ハイデガーの存在論は、非人称的な第三項、すなわち「存在」を経由しなければ存在者を了解できないとしたが、これはレヴィナスの批判するところであった（ハイデガーは倫理に対して自由の優位を肯定した（レヴィナス, 2005, 67 頁））。存在者が存在に従属するのではなく、存在者が存在に対して哲学的に先行することを顔は可能にするのではないだろうか。

「語りにおいて〈他者〉に近づくとは、〈他者〉の表出を迎え入れることである」（レヴィナス, 2005, 81 頁）。〈他者〉の表出＝顔の現前によって、〈他者〉は何か（意味）を語る。したがって、「ことばを語る」ということは、「意味を表出する」ということである。

あるいは、ことばは関係としても提示される。ことばという関係は、ことばの本質によって定義される。ことばの本質とは、呼びかけであることだ。ことばは、誰かに向けて語られたり、書かれたりする。したがって、ことばを語るということとは誰かに向けて語ると

いうことでもあるのである。逆にいえばこの誰かを確かにするのがことばなのである。以上のことから次のように言えるだろう。すなわち、ことばは啓示的な機能を持ち、ことばによって〈他者〉が啓示されるのである。〈他者〉が啓示されそれを迎え入れる、という関係——倫理＝形而上学的関係——を可能にするのはことばであると言われたのはこのためであろう。先のことと合わせて考えれば、「ことばを語る」は「誰かに向けた意味の表出（という関係性）」と定義できる。

ことばが語られるのは、関係の諸項のあいだに共通性が欠けているところにおいてであり、共通平面が欠けており、共通平面がはじめてかたちづくられなければならない場所においてなのである。ことばはこのような超越のうちにその場を有している。〈語り〉とはかくして、絶対的に異邦的ななものかをめぐる経験であり、純粋な「認識」あるいは「経験」であって、驚嘆という外傷となる。（レヴィナス, 2005, 134 頁）

ことばによって主体と〈他者〉の間にある分離と超越を保持したまま〈他者〉と関係することが可能になる。そしてことばによってはじめて共通平面がかたちづくられる。そうでありながら、共通の概念に到達することがなく、全体性をかたちづくることのない関係を、レヴィナスは「関係なき関係」と呼ぶ。

ことばは個別的なもののから一般的なものへの移行を可能にする。〈他者〉が語ることばによって、内部性をかたちづくるために必要な世界を共有しているということを感じさせてくれ、共通性が創設されることになるのである。

3-3. 真理と正義

超越と分離を維持する形而上学的関係という枠組みのなかで問題にされるのは〈他者〉との関係だけではない。真理もまた、形而上学的関係のなかで考察されねばならないだろう。レヴィナスは、プラトンが定立した善の構造を支持している（レヴィナス, 2005, 200 頁）。善は全体性を超越したものであり、それは欲求によってではなく渴望によって導かれるものであるものだというプラトンの教えを肯定している。したがって、真理は超越と分離を前提としていなければならない。レヴィナスは、啓示によって真理はみずからを表出し、私たちが真理を探求するに先立って私たちを照らし出すのだとしている（レヴィナス, 2005, 200 頁）。

〈私〉が真理に向かって開かれるのは〈他者〉によってである。〈他者〉の、〈無限なもの〉が現前することによってこそ、無限なものの観念を私は抱くことができる。そのような意味で、〈他者〉とは形而上学的な真理の場になる。真理は、4 節で取り上げる内部性をもつもの、すなわちなものも欠けていないものによって、そして〈他者〉のうちで探求されることになる。レヴィナスのいう形而上学とは、社会性という様式のなかでおこな

われるものである。主体の自由が〈他者〉によって問いただされることが極めて重要なことであると言える。

道徳が開始されるのは、自由がそれ自身によって正当化されるかわりに、みずからを恣意的なもの、暴力的なものと感じるときである。道徳とともに開始されるのは了解可能なものの探求であるけれども、同時に知の批判的な本質もまた現象し始める。

(レヴィナス, 2005, 157 頁)

3-1 で論じたように、批判あるいは哲学が知の本質であり、その批判こそ知の特権であるとレヴィナスは論じている。その批判的な側面は現れるのはまさに〈他者〉と対面したときであり、対面こそが知性の本質を引き出すことができる。あるいはこう言うこともできる。「真理とは〈同〉と〈他〉とのあいだの関係の様式である (レヴィナス, 2005, 111 頁)」。

〈他者〉と対面するときに〈他者〉を主題として定立し、開示性、了解可能なものとして〈他者〉を認識することは〈他者〉に対する配慮がない。そのような場に真理は表出しない。〈他者〉を〈他者〉として迎え入れること、「語りにおいて正面から〈他者〉に接近することを、正義と呼ぶことにしよう (レヴィナス, 2005, 128 頁)」。したがって、真理は正義を前提としており、語りという正義において真理は出来るものだと言える。

私は啓示 (渴望) によって〈他者〉との関係に導き入れられ、正義 (真の語り) によって真理の場に至り着くことができるのである。その場において私は、それまでの自由という権能を問いただされることによって、知性のより本質的な側面を覚醒させることができる。このような一連の関係性がレヴィナスの論じる倫理 = 形而上学的関係である。

4. 第二部内部性とエコノミーについて

4-1. 享受、幸福、身体

第二部で論じられるのは、〈同〉と〈他〉の関係ではなく、〈同〉の内部において生起する様々な関係である。〈同〉とは絶えず同一性を内容として所有する主体であるが、同一性の所有とは具体的にどのような様相であるのか、そして〈同〉ということによって〈他〉との関係はどのようなものになるのかということが論じられる。その際に重要となるのが3節で論じた分離という様態であり、その分離は内部性に由来するものであるということを示したい。

私たちは何によって生きているのだろうか。レヴィナスが挙げるのは、おいしいスープ、大気、光、風景、労働、観念、睡眠等々である。これらは単なる生の目的ではないし、また単なる生の手段でもない。そのようなものから栄養を補給して私たちは生きているのだが、この栄養補給をレヴィナスは享受と呼んでいる。享受は目的連関や有用性によ

ってだけでは理解することができない。レヴィナスは享受とは糧を得ることだと言い換えているが、この糧を得ることは他なるものを〈同〉へと吸収することであり、その意味で栄養補給とは他なるものの認識によって他なるもののエネルギーを吸収し、〈私〉へと変容させることなのである。つまり、享受というモメントにおいて働く主体の作用とは認識であり、この点において3節で取り上げたような〈他者〉という「絶対的に他なるもの」との関係とは異なるものである。他なるものを吸収することによって、〈同〉は〈同〉であり続けることができる。

この享受はまた幸福でもあるとレヴィナスは言う。「幸福とは、呼吸すること、見ること、食物をとること、はたらくこと、ハンマーや機械を操作すること等々にさいしての喜びであり苦しみなのである（レヴィナス、2005、212頁）。」幸福とは対象との関係における内容であり、その内容が喜びや悲しみであるということになる。幸福とは感情をもつことであるとも言える。「享受その幸福の自存性は、いっさいの自存性の本源的な構図なのである（レヴィナス、2005、211頁）」この〈同〉の享受や幸福をレヴィナスは生のエゴイズムと呼んでいる。また享受と幸福において主体を動かすものは欲求であり渴望ではない。〈同〉をはじめに動かすものは欲求である。〈同〉は自らの欲求によって生き、また欲求によって幸福である。外部からもたらされる渴望によって生きているのではない。したがってこの点でも享受や幸福は自存的である。

享受と幸福において重要であるのが身体である。身体は人間がみな最初にもっているものであり、また世界のうちで位置を占め、世界を第一次的に享受するものである。

身体とはそれ以上に、所有し労働し、時間をもち、それによって私が生きざるをえないものの他性それ自体を乗り越えてゆくしかたなのである。身体とは自己の所有にほかならない。（レヴィナス、2005、226頁）

「それによって生きざるをえないもの」とは、先に述べた世界、大気、観念等々である。その他性を乗り越えてゆくしかたが身体であるということが意味するのは、すなわち身体とはエゴイズムそのものであるということである。身体をもつことによって何かを把持することができると同時に、世界において位置と時間を得ることができる。

ここで問題になるのが時間である。欲求と渴望の差異に注目したとき、それは能動や受動という概念によってだけではその差異は理解できない。欲求とは現実的なものに対する欲求であり、他なるものの同化によって〈私〉はその欲求を満足させることができる。欲求は現実的なものを対象としている。〈私〉が関わるのはひたすら現在である。他方、渴望は〈私〉を超越し分離が決定的なものに対する渴望であり、それは未来に対して開かれた時間を本質的に有している。認識や反省に依らない関係における時間は未来に方向付けられている。したがって、欲求が前提する時間はそもそも渴望によって開かれた時間であり、欲求はそのようにして時間が開かれることによって〈他〉を〈同〉に吸収する時間を

得ることができる。欲求は渴望に基づくものでしかありえない。そのときに時間をもつこと自体が身体によって可能になる。身体であることが、世界——これも他なるものである——のうちで〈私〉としてあることなのである。

4-2. 家、住まうというできごと

世界という他なるものなかにありながら〈私〉であるということ——時間と位置をもつこと——は前項のようになされるのだが、その世界に到来する以前の〈私〉、主体はどのようなものであるのだろうか。それが次に問題となる。主体はどこから世界にやってこなければならない。他なるものと関係をもつその前提となるのがレヴィナスが提起する家という概念である。

住まうことを、他の「道具」とならぶ一箇の「道具」を利用することと解釈することもできる。……家はじっさい、人間の生に不可欠な用具的なものにぞくしている。家は悪天候から人間を守り、敵や邪魔者からひとを匿うことで役にたつ。にもかかわらず、人間の生が置かれているさまざまな目的の体系の内部で、家はある特権的な位置を占めている。(レヴィナス, 2005, 306 頁)

家は事実的な地平においては人間によってつくられた建築物であり、それは人間にとっての避難所として機能する。そうでありながら、家は特権的な位置を得ている。しかし、家に対する悪天候や敵や邪魔者は単に字義通りの意味を示すにとどまらない。

思考の歴史をつうじて形而上学が身にまとうことになった、もっとも一般的なかたちのもとでは、形而上学はじっさい——どのような未知の大地がその世界の縁を囲っているように、またその世界がなお未知の大地を隠しているようにとも——私たちになじみ深い世界から旅だち、私たちが住まっている「わが家」をはなれて、見知らぬ自己の外部、向こう側へとおもむく運動としてあらわれる。(レヴィナス, 2005, 38 頁)

第一部冒頭において、「他なるもの」、自己の外部におもむく運動が形而上学であり、そのはじまりとなるのが「わが家」であることが述べられた。この引用において、家という概念は〈私〉という主体、つまり〈同〉が〈他〉におもむくときのはじまりとして言及される。それに対して絶対的外部性として示される「向こう側」こそが「悪天候」であり、自己の統治が及ばない外在物である。

家の特権的な役割は、人間の活動の目的ではなく、活動の条件であり、その意味では活動のはじまりとなることにある。……人間が世界のうちに身を置くことになるのは、私的な領域、つまりわが家から世界に到来した者としてであって、しかも人間はいつでもわが家に身をしりぞけることができる。……内部にあると同時に外部に存在するものとして人間は、親密な空間から出発して外部に向かう。この親密な空間は他方、世界というこの外部に位置する家のなかで開かれる。(レヴィナス, 2005, 306 頁)

世界のなかにながら世界から分離している親密な空間である家は、主体の人間活動の条件でありその始点となる。そして人間は好きなきに「わが家」に退却、つまり立ち返ることができる。これは事実的な地平においては単に「家に帰る」ということとして解釈できる。しかし、家は事実的な地平におけるそれとは異なる様相を呈す。「家に立ち返る」ことは現象学における再現前化、すなわち主体の想起によって自然や世界、自己や〈他者〉を総合的に把握しようとする営みである。再現前化（表象化）は、つまり自らの原体験に立ち返ることである。原体験それ自体が、いま、ここで、まさに生起し経験しているかのように想起することが再現前化であり、それが「家に立ち帰る」ことである。「家に帰る」ことで主体は世界の内部にいながら世界と距離をとる。「世界は観想する主体はこうして、住みかというできごとを前提としている（レヴィナス, 2005, 309 頁）」。「住みか」は単に建築物なのではなく、ひとつのできごとである。「住み着く」というできごとによってはじめて主体は世界の内部にいながら分離した主体たりうる。

観念論の主体はじぶんの対象ばかりか、じぶんが存在している場さえもア・プリオリに構成するものであるけれども、厳密にいえばじつは対象や場はア・プリオリに構成されるわけではない。観念論の主体は、正確にいて事後的に対象や場を構成する。つまり、具体的な存在として場のうちに住まったあとで構成する。このことは知や思考、観念をあふれ出すことがらなのであるが、主体は事後的に、住まうというできごとを知や思考、観念のうちに封じこめようとする。（レヴィナス, 2005, 307 頁）

「住まう」というできごとは、確固たる主体が、家を建て、そこに住まうというかたちで生起するできごとではない。むしろ住まうというできごとと同時に（によって）主体が確立する。したがって、レヴィナスの論考において、家は、常に起源である。そして、知や思考、観念を常にあふれ出していくようなことがらである。なぜならばそれは反省の対象になったときにはすでに反省から逃れ去るような現在であるからである。

また、住みかというできごとは集約が実現されたひとつのかたちである。

自然が表象され、自然に対して労働がくわえられ、また自然がたんに世界としてえがき出されるためにも集約が必要である。この集約が家として実現される。（レヴィナス, 2005, 306 頁）

再現前化を行うために集約が必要である。この集約という概念こそがレヴィナスの言う「家」の中心をなす。家へ立ち返ることは、再現前化であった。再現前のためには原体験が不可欠である。主体は時間の流れのなかでさまざまな体験をするが、それを蓄積しておかなければ好きなきに立ち返ることはできないだろう。その原体験の蓄積が、家として実現される。つまり、原体験の蓄積は同時に主体の内部を持続的に流れる時間の蓄積でもある。『全体性と無限』における〈他者〉との分離のなかで決定的なものがこの内部的時間の差異による分離である。この内部的な時間は他人に譲渡することができないものとし

て主体の内部に確立されたものである。また、この内部的な世界がことばによって共有できるものとなることは論じた。これは贈与として成り立つのであって、その応対としては迎え入れることのみが可能である。

このように、〈同〉の内部では享受や家といったできごとが生起すると同時に、主体が確立していく。この主体の内部は誰も見ることも、触ることができない絶対的なものとして蓄積されているのだが、この〈同〉の同一性こそが〈他〉との分離を決定づけているのである。

5. 第三部顔と外部性について

5-1. 顔と外部性

本節では、〈他者〉の現前の様式である顔について詳述する。

主体の視覚という認識モデルは、さまざまな存在に接近するときの一般的な様式として定義されてきた。レヴィナスが言う顔とは、この視覚を拒絶するものとして提示されている。視覚による認識を拒絶するということは、理解や包括が不可能だということを示している。〈同〉の同一化の過程から逃れざる〈他者〉の表出が顔なのである。

〈他者〉は無限に超越的なものでありつづけ、無限に異邦的なものでありつづける。〈他者〉の顔においてその顕現が生起し、その顔は私に訴えているけれども、〈他者〉の顔は私たちに共通なものでありうる世界と手を切っている。(レヴィナス, 2006, 30 頁)

共通なものと手を切っているようなこの対面においては、ことばが二項を結ぶこととなる。ことばは、結ばれていながら結ばれていないという逆説的な状況を可能にするものとして定義されるのである。

形式論理のことばではつかむことのできない絶対的な差異を創設するのは、ことばだけである。ことばによって、ある関係が、類の統一性と手を切った項のあいだで成就されるのである。この諸項、つまり対話者たちは、関係から切りはなされている。あるいは、関係のうちにありながらなお絶対的なものでありつづけている。(レヴィナス, 2006, 30 頁)

語りによって〈私〉と〈他者〉は関係づけられるけれども、〈他者〉はそのことによって〈同〉に取り込まれるわけではない。ことばということが意味するのは二項の絶対的な隔たりであって、対話——対面における語り——は視覚というモデルのように主体に引きつけられることがない。顔の顕現によって無限なものが生起し、その無限なものによって分離された内部性に無限なものの観念が置かれることになる。この無限なものの生起が、有限なもののいっさいに先行している。無限なものの観念は有限な思考から溢れ出すこと

によってこそ、〈私〉は〈他者〉の前に立ち止まり、躊躇せざるをえなくなる。このような内部性と外部性のかかわりが、『全体性と無限』において提示される倫理という関係なのである。

私のうちにある〈他者〉の観念を踏み越えて〈他者〉が現前する様式は、じっさい顔と呼ばれている。顔というその現前のしかたは、主題として私の視線のもとに姿をあらわし、ひとつのイメージをむすぶさまざまな性質の総体として繰りひろげられるものではない。〈他者〉の顔は、顔が私に残す、手でかたどることのできるイメージを不断に破壊し、それをあふれ出す。私に釣りあい、観念されたものに釣りあった観念をつまり適合的な観念を破壊して、あふれ出すのである。顔は性質によってあらわれるのではなく、それ自体としてあらわれる。顔はみずからを表出するのだ。(レヴィナス, 2005, 80 頁)

この引用は先にも部分的に示したものであるが、この引用が意味することはすなわち、〈他者〉は顔においてコンテクストなしに意味を表出するということである。コンテクストやカテゴリーといったものに絡めとられることなく〈他者〉が〈他者〉として現前することを可能にするのがこの顔という様式なのである。コンテクストやカテゴリーに依らないということは、〈私〉が手にすることができる事前の情報や手がかりとはいっさい手を切ってあらわれるということ、〈私〉の思考そのものをあふれ出しているということである。このあふれ出す無限なものを受け入れるということが、無限なものの観念を抱くということになる。〈他者〉は〈私〉の外部から到来し、〈私〉が構成している内部性以上のものを〈私〉に授ける。顔と外部性という語が意味することは以上のようなことだと言えるであろう。レヴィナスは、このような外部性、無限なものとの関係に、倫理を発見したのである。

5-2. 外部性

外部性は分離した存在にとってこそ外部性となりうる。ただし、外部性は内部性との対立によってうまく表現されるものではなく、真の外部性があらわれるのは対面にあってこそである。そのあらわれる様式、顔は、主体に対して高みから到来するのだとレヴィナスは繰り返し主張している。この高みという語が意味するのは、外部性の優越であり、上方という方向性を主体に授けることになる。

外部性とはつまり、まったく優越〔上位〕なのだ。間主観的な空間のこの湾曲によって、隔たりが屈曲させられて高みとなる。……外部性が優越〔上位〕として実現する間主観的な空間のこの「湾曲」と、あらわれる対象に対してとられる「視点」の恣意性とを区別する必要がある。とはいえ後者の恣意性は、あやまりと思ひなしのみなものであり、外部性と対立する暴力に由来するものであって、前者つまり空間の湾曲の

代償なのである。(レヴィナス, 2006, 236-237 頁)

主体が対象を認識するとき、つまり視覚によって把持するときには、主体の任意の視点がとられることになる。しかし外部性とはそのような様式であらわれるのではなく、上方から到来するものなのである。上方とは、真理の方向を指し示すのと同時に、外部性が主体と同じ地平にはないことを表現するために用いられている。〈他者〉によって真理が可能になると言われたのは、あるいは、〈他者〉とのこの関係の様式が真理であると言われたのはこのためである。無限なものの観念を受けられ、主体の志向が上方に向くためには外部性を必要とする。したがって、レヴィナスが『全体性と無限』で表現しているのは、人間の知性の擁護でもあるのである。

6. 結論

以上に見てきたように、『全体性と無限』の序文でこの書物が問題にするのは、全体性、無限性、主体性であるということが示された。第一部で概説的に論じられたように、全体性は形式的な論理、そして主体のかたちづくりの内部性の側にあるものであった。他方で無限性は〈他者〉が担うものとされた。〈他者〉が主体に到来すること、それを主体が迎え入れることによって主体の内部に置かれる無限なものの観念が主体の自由を問うことになるのである。第二部では、〈同〉の内部でおこる様々な関係の様相が記述された。レヴィナスによって提示された享受や家といった概念によって、〈同〉と〈他〉の絶対的断絶の根拠が明らかになった。第三部では、第二部で論じられた〈同〉、〈私〉に対して絶対的的外部性である〈他者〉が顔という様式によってあらわれること、そして〈他者〉の現前によって上方への地平が開かれるということが叙述された。〈他者〉のあらわれにおいて、対立の前に融和があるということがレヴィナスの主張であった。

『全体性と無限』を貫いているものは倫理である。レヴィナスの言う倫理とは、〈他者〉との関係なき関係、形而上学的関係である。この関係は断ち切りたくても断ち切れない関係であり、〈他者〉は私に対して否応なしに現れ、そして驚きと覚醒を私に与える。この外部という驚きと知性の批判的側面を覚醒させることこそが人間の知性を推進させ、真理の探求をも可能にする。倫理が哲学の根底、あるいは人間生活の根底にある。倫理的关系なくして哲学はありえない、ということをレヴィナスは『全体性と無限』において示している。

私たちが努力する目標は、具体的に言えば、匿名的な共同体のうちで、それでもなお《私》と〈他者〉の社会を、ことばと善さを維持しようとするものである。(レヴィナス, 2005, 71 頁)

〈他者〉は私の認識や理解に取り込まれることを拒みつつける。〈他者〉に対して私自身

を開くこと、〈他者〉を迎え入れること、そして超越という異邦の高みから到来する〈他者〉に対して頭を垂れることがレヴィナスが説く「善さ」である。レヴィナスが全体性に抗するのは、主体の擁護のためであり、また知性の擁護のためでもある。むしろ知性の本来性を取り戻すためにこそ倫理的関係を再考しなければならなかったのだ。全体性としての伝統的な西欧哲学を批判するが、これは決して反知性主義的な批判であるわけではない。哲学をより本質的なものへと高めようとしているのである。忘れ去られてきた〈他者〉の他性を取り戻すことは、主体を擁護することにもなる。人間は全体性をかたちづかってしまう。しかし全体性をもつあらゆるものに対して、他性という外部が存在する限り全体性は破碎されざるを得ないということ、あるいは全体性のなかで「善さ」や「ことば」を守っていかなければならないということを、レヴィナスは『全体性と無限』において表現している。

注

- 1) これはレヴィナス自身によって序文で言及されていることである。「すくなくとも、いくつかの小道が示す無味乾燥さ、第一部に含まれる晦渋さのために、本書を投げ捨ててしまわれたいことを希望している。その第一部こそが、予備的な性格をもってはいるものの、本書におけるいっさいの探求の地平をえがきとるものであることを強調しておく必要がある」（上、33頁）。本稿における引用はすべて、レヴィナス（熊野純彦訳）『全体性と無限』（上）、岩波書店、2005 および同上（下）、2006 より。
- 2) 政治は国家という全体性をかたちづくるものとレヴィナスは捉えている。
- 3) （レヴィナス、2005、25頁）参照。
- 4) 「私たちの論考全体の意味は、いっさいの哲学のぬきがたい確信に異議をとなえることである」、すなわち「対象についての認識が超越との究極の関係であり、〈他者〉も一なるほどさまざまな事物とはべつのものであれ—対象として認識されるべきであるという確信がそれである」。さらにこう付け加える。「私たちの論考全体の意味は、他者が知を永久に逃れ去ることを確証しようとするものではない。他者について認識や無知を語ることにはどのような意味もないことを確証しようとするものだ」（レヴィナス、2005、169頁）。
- 5) 「ヘーゲルの現象学—それは、区別されていないものの区別として自己意識を考えるのだが—が表現しているのは、自己の自己に対する対立にもかかわらず、思考された対象の他性においてみずからを同一化する、〈同〉の普遍的ありかたである」。（レヴィナス、2005、46頁）
- 6) 平仮名で書かれた「ことば」は、レヴィナスが用いる独特な意味での「ことば」であり、これは本稿における「言葉」とは区別して使用する。

参考文献

- [1] レヴィナス、エマニュエル著 熊野純彦訳（1961/2005、2006）『全体性と無限（上）（下）』岩波書店。